特1 — 278

本草圖譜

本草圖譜巻之九十目録

灌木類

木槿	きもちを	一種	しろもちを 二
一種	絞りの物 三	一種	そしへ小 四
一種	淡紅の物	一種	深紅のもの 五
一種	細辨淺紅	一種	淡紫の千葉 六
一種	白花の千葉	一種	淡紅の千葉 七
一種	紫の千葉	一種	白色千葉 八

一種	ぶんてんくハ	九	一種	たこまぶわら
扶桑	ぶつさくげ	十	一種	かすゞりの物 十一
一種	白色の物	十二	一種	かすゞり千葉
一種	紅の千葉	十三	一種	黄色の千葉
一種	白色の千葉	十四	木芙蓉	ふよう
一種	白色の物	十五	一種	白色千葉 十六
一種	酔芙蓉	十七	一種	七面ふよう 十九

本草圖譜卷之九十

東都　岩崎常正　著
男　岩崎信正
門人　小山廣孝　校

灌木類

木槿

きもちゝ　和名鈔
あさがほ　万葉集
むくげ　京木槿の音轉
もちゝ　城北
むくてんのき　城外
かきつゞき　奥外
ほんてんくハ　藩外小槿花の名ほんてんくハと呼ぶるゆへ別ある日
給　通雅
彝華　日
愛老　正字通
治英　群芳譜名物方言
朝菌　異籍便覧

人家多く栽て藩ゝあり　樹高さ丈余に至る　枝葉立
生し　葉の形　枝葉花に似て　大ひなる花又を如し　微し
毛あり　夏月枝の　晝日間をに　蒼を生し　花を開く形
軍荼に似て　深紫色にして　舞の本深紅色をあり
朝に開き夕に落ち　故に秋名に朝開暮落花と
云ふ　実は指頭の　大さにして　中に小さき実あり

一種

樹葉とまた尋常の品に同しく花白色に淡紅の紋りをまたるもの

一種

ろこんは

樹葉とまた尋常の品に同しく花白色鮮の本深紅色を帯らるもの

一種

樹葉ともに桑常の品に同じく花紅色にして本に深紅色を帶び葉の本に細き解けるもの

一種

樹葉ともに尋常の品に同じく花紅深紅色を帶び葉の本に細き解けるもの

一種

樹葉とまた尋常の色に同しく花淡紅色にして本に深紅色を帯ひ葉の本より先まで細縛をかけるもの

一種

樹葉とまた尋常の色に同しく花淡紫色にして千葉のもの

一種

樹葉とも尋常の品に同しく花白色にして千葉のとの

一種

樹葉とも尋常の品に同しく紅色にして本に深紅色を帯ひ千葉なるとの

一種

ゐらんてらんくん　をたんくんハ　小槿花

文水　大島土俗名　ホームコルハ　和蘭

和産のものをおく見れ琉球より来る又八丈島に産れと云暖国の産なへ寒を恐る冬月室中に養ハされハ必ず枯る樹ハ木槿に似て高さ三四尺瘠て軟かあり葉ハ葡萄又構に似て小く面に淡緑色の斑紋あり秋月葉の間に一花ツ生れ蒼の形木槿に似て小く開くときハ五瓣淡紅色大さ二分許り原人して桃花に似たり後実を結ぶ四子並ハ附て大さ麻子の如くにして毛あり

一種

てまぼう
わらのき 豆部
黄槿 李鯢文集
金木蘭 福岡府志 山中類聞
豆部の海涯に自生あり樹木槿に似て高さ三丈
葉は蔓荊の葉に似て大く厚く黄綠色にして
互生は夏月葉の間に花を開く形木槿に似て
小く薄厚く本に深紅色を帯つり

扶桑

琉球 むくげ

ふつさうげ

福桑 廣東新語

菩薩豁那 中山傳信錄

和産ニ於テ琉球ヨリ來ル暖国の産ニ於テ寒ニ恐ル冬ハ宮中ニ養ハシ夜ハ必ス枯ル葉ヲ生ルニ形扶桑の葉ニ似ニ小ク深緑色面背共ニ光澤ヲ夏月稍ヨシ枝間ニ花を開ク形状木槿ニ似テ大ク深紅色ヲ光澤ヲ

一種

樹葉ともに前条の如く花の形状も又前条の如くにして黄褐色なる紅色を帯ふるもの

一種

樹葉ともに前条の如く花も又前条の如く白色にして本に深紅色を帯ふるもの

一種

樹葉ともに前条の如く花黄陽色にして本山深紅を帯び千葉なるもの

一種

樹葉ともに前条の如く花深紅色千葉なるもの

一種

樹葉ともに
前条の如く花
黄色千葉に
るもの

一種

樹葉ともに
前条の如く
花正白色千
葉にるもの

木芙蓉 ふよう

醉客 事物 世理

文官 秘傳 花鏡

錦城 名物 方言

芙蓉と稱するハ蓮の名ゆゑ也
木芙蓉としてハ今ハ人家に多く
栽也春高さすり叢生高サ
五六尺余に至ル葉の形葡萄の
似て花又翔く大ふり杜楯に
花を開く形木槿に似て深く

淡紅色ナリ皺あり

一種

一種
醉芙蓉
秘傳花鏡
酒芙蓉
廣東新語
樹葉とも小前条の如く
花も形状前条の如く
千辭ずして初め開くとき
ハ白色次第ニ紅色を
帯ひ終ニ深紅となり形
て醉芙蓉の名あり

一種七面芙蓉
和加

同
中の色
同
深紅とぶる物

樹葉とまふ前葉に似て　花一蒂に七花を開く形狀梅の一種　まふさうんの如し淡紅色にして牡丹の如し

本草圖譜卷之九十一目録

灌木類

山茶　つむき
一種　千ちゆ
一種　ぶらきつすき
石榴茶　集解
一種　かうこ
一種　大和さんく
蹯躅茶　やまつむき
一種
一種
一種
一種
一捻紅　集解

一種　せきもり
一種　蜀さり
一種　あへしま
一種　ふまち
一種　今出川
一種　不しくはあり
一種　わたしもり
一種　夕ぎり
一種　かけもし
一種　さゞはおこ　七
一種　ききんらん
一種　玉川ちどり
一種　まうかん　九
一種　ちむら
一種　志ぶつる
一種　志くき
一種　八重もみし　十一
一種　からわしき
一種　かけわしき
一種　かさしき
一種　からいと
一種　さきわけ　十四
一種　こやさめぐり　十五
千葉紅　唐志し　十六
一種　からそめ
一種　かも川
一種　をきのふこ
一種　かへい
一種　つかり
一種　いそあらし
一種　をおたちをお
一種　志夕をかさね

一種　からくれふい
一種　からつむき
一種　うすいろ
一種
一種
寶珠集解　たまてにこ
一種
一種

一種　唐八重つむき
一種　おとめ
一種　すらぬき
一種　すこうも　十九
一種
一種　たのそて
千葉白　かまり
一種　ぬきのやま

一種　白蓮花
一種
一種　あし廿
一種　冬咲のあらたま

一種　しらたま
一種　白たん　廿三
一種　横紅白　廿四

本草圖譜卷之九十一

灌木類

山茶　つむき　曼陀羅　群芳譜

椿の法をきゝしなれハ誤りなるを椿の條に記を其ハおゝに畧れ本邦に昔より種類ありて今二百余種に及べり其種を悉く顕をも能ひざる也是其一二を出すのミ集解にも其種類の名ありとゝくとも三四名なるを其種の物に近きハ各條に隨て載る者人各条の別も園中に載て悉く目擊するをあたはさるに筑前侯の山茶譜花に或の圖も得て補ふものなり

躑躅茶 集解
やまつゝき
山中自生の品にして
樹高さ二丈許り四時
葉凋まず葉の形何
の葉も似て円く原
く周りに鋸 齒なり

深紅色なり花散るときは
五辨散せずして落る実
指頭の大さにして中に三四子あり
冬月枝の先ことに蒼
を生し花を開く五辨
或は六辨にして

一種 千[illegible]

花五六瓣
少して丹紅
色なり

一種 上つま

花瓣円くして
深紅色なり

一種 [illegible]

葉の形細く
鋸歯粗ぐし
花瓣細くして
小く紅色なり

一種

ちりつむき

花の形沙まつもきに似て紅色に散るとき辨離て落つ

石榴茶 解集

花の形扶外に大なる辨ならず中に細き辨数十ならず紅色にて石榴の千葉に似たり

一種 トもん

花の形外大ひなる瓣なり
中に淡紅黄色の細き瓣あり

一種 唐子

花の形状前条に似て中の瓣に白色の斑なり

一種 ちゞかけ

花の形状外に大なる瓣重なり
中に淡紫色に白き斑なるふき瓣なり

一種

大和こんかい

花の形状前に似て外の辞に白き斑紋なり

一捻紅 集解

そうかせ

花草瓣白色にして粗き紅色の絞りなり

一種

關とり

花草瓣淡紅にして粗き絞りあり

一種 つけたし

花草瓣白玉にして前より粗き紅色の絞りあり

一種 蜀あり

花草瓣白色にして辺に紅色を芸てる

一種 こじまし ちこ

花草瓣淡紅色に紅色の絞りあり

花草瓣白色にして淡紅色の細き絞りあり

一種 おべしま

一種

ふまんらん

花草辨白色
ふまち紅色の
紋ノ何

一種

ふまち

花草辨淡紅色
ふまち淡紅の紋
脈ノ中央ハ深
紅色の筋ノ

一種
玉川
ちどり

花草辨白色にして淡紅色の紋その中に細き星はり

一種　今出川

花草辨白色にして紅色の筋に細き星はり中に淡黄色の細き辨はり

一種
そくかん

花草辨白色にして紅色の斑紋はり

一種

ふしんまだい

花草瓣紅色にして白色の点あり

一種

扁ひ

花草瓣紅色にして白色の斑紋あり

一種

わたしあり

花千葉白花にして淡紅色の斑あり

一種

一種

花千葉白色にして二三瓣に紅色の斑あり

一種 タぎり

花重辨白色にして紅色の細きすトあり

一種 志ぐ色

花千辨白色にして紅色の細き点あり

一種 八重ゑみじ

花千辨白色にして紅色の粗き斑あり

花千辨にして半ハ紅色半ハ白色に紅色の点あり

一種 かぶつしき

花千瓣白色にして紅色の粗細の斑まじりし

一種 かぶ川

花重瓣淡紅色にして紅色の細き斑あり

一種 うげつしき

花千瓣淡紅色にして紅色の斑あり

本草圖譜 巻之九十一

一種 かぶしま

花瓣細く先円く千瓣白色にして深紅色の斑なり

一種 ひきのなみ

花瓣細く千瓣深紅色にして紅色の斑なり

一種 かへい

花重瓣紅色にして白色の斑なり

一種 さきわけ

一枝の内に一花ハ重辨淡紅の花を開き一花ハ白色に淡紅の斑なる花を開く

一種 からいと

花重辨紅色にして白色の斑なり中に細き辨あり

一種 つるかぐら

花千辨紅色にして白色の斑なり

一種
いそのかし

花重辞大にして淡紅色に白色の斑あり

一種
ミやこめぐり

花重辞大にして白色に紅色の斑あり

一種

まるはちまな

花重辨白色
ふしを紅色の
細き筋に細を
喜ける

千葉紅 集解

唐志し

花重辨深
紅色ふしを
原し

一種

花重辨淡紅色

一種

一種

唐人重

花千辨深紅色

花重辨淡紅色

帶了

一種
かぶつむき
花重辨深
紅色ゆゑ
大なり

一種
おとめ
花千辨
淡紅色
なり

一種 うすいろ

花千辨淡紅色にして小なり

一種 かき 色ヅ

花千辨淡紅色にして形さくらの如し

一種 すゐ雪

花千辨淡紅色にして紅色を帯びて小なり

一種 もおろも

花千辨水紅色にして さくらのもし

一種 ゆうあけ

花千辨水紅色にして辨細し

一種

をやりあり

花千辨淡紅色小して辨細く共ほり

一種

にまれ色

花重辨淡紅色小紅色を帶び蕊四方へ散せり

一種 たぶたで

花重辨白色の淡紅則を帯つ

寶珠 集解 たまたむさ

花千辨正白色にして外の辨ハ開きゆの辨ハ開かぬにして五の如し

千葉白 集解
一種
一種
白蓮花

一種
しらたき
花重辨正白色なり
一種
白しし
花重辨正白色なり

一種
白たん
花千葉正白色にして大なり

一種

よしの法

花千辨正白色ゆゑ辨細し

一種

横江白

花千辨正白色ゆゑ菊花に似たり

一種 冬咲のしらたま

花草辨正白色ゆゑ冬月より開く

本草圖譜卷之九十二目録

灌木類

蝋梅 かふしめ

一種 とうらうもい

伏牛花 へしのかふ

二 木綿 ぱんや

同

同

同

同

八 同

九 草綿 くさわた

十

一種　一種

柞木　いぬつけ　十三　一種

一種　こつけ　十四　一種　亀甲つけ　十五

莫楊木　ゑんこんつけ　十六　一種　くせつけ　十七

不凋木　てんのむめ　十八　賣子木　さんだんくい

木天蓼　わたび　廿　小天蓼　さんろんくい　廿一

接骨木　ふいとこ

惣木　だらの木

靈壽木

本草圖譜卷之九十二

東都　岩崎常正著

男　岩崎信正

門人　小山廣孝　校

灌木類

蠟梅　からむめ　ちんきんむめ　ろうもい　らんむめ

九英梅　汝南圖史　狗蠅花　上同　狗纓　群芳譜

蘭山の說に百九代後水尾帝の時朝鮮より未と云傳ふ故に俗にからむめ等の名にあらしつり樹高さ一丈許り一根より叢生は円並對生し冬月八九辨の淡黄色の花を開く透明て狗蠅の羽の色又蠟にて造りあるが如く中に紫黒色の斑ある細辨あり開くときは香甚良し春月葉を生ぬ形状柿の葉に似て薄く先尖り面背ともにさらつきあり実を結ぶを甚た稀あり結ぶときは夏月熟ぬ

本草圖譜
形狀次の物と同じく此品時珍の説の豹蝋梅なり

一種

とうろうもい
たんかうもい

享保年中漢種渡り今世に多く花の形前条に似て大に下に向て開くといへども半開ふる香も前条と同く後実を結ぶ大さ大母指の如し先に花の如き物を生ず葉も前条に似て大に長し此品号珍説の名口梅にして又檀香梅とも云り

伏牛花

へいのわらは

まがいぢ 淡州 さいつまら

わねをいまうら

いぬのちうはき

小木にして高さ三四尺に叢生に
葉の形石榴の葉に似て長く尖
りて七葉あり一葉をに長き刺あり
細くして甚鋭く若誤つて人を傷る
時は甚く害ありといふ春新葉に隨
て数花を生に開くときは出解黄色
大さ二三分許り所り後実を結ぶ
形赤小豆の如し熟して深紅色葉
も共に紅色となりて散落れ

木綿

パンヤ 其名恐くハ、撰中枝班枝おの音轉ふくゝ貝原子の說ハ蛮語ゝ
くとゝ(ルとも)蛮語ハパンヤの名同名ハ花蛮羅摩と云名異物

きわく 木絲樹 珍玩考明 廣西通志　絲樹 潛確類書

攀枝花 廣東新語　斑枝花 本草　枝枝花 類書纂要

攀桂花 明一統志　龍花萼 唐韻 漢瓊枝 群芳譜

波羅樹 唐書南蛮傳 三名引紀花日秀　吉貝 嶺南雜記ハ木綿之廣群芳譜草綿之

ユスヒイヒ ムロ羅 甸キセーロン 上同　コットニラムムブッサムヒニコ人 上同

ボムベシイン 荷蘭　カツウンボーム 上同　ボウムウラルレ 上同

木綿類色三種あり一ハ攀枝花一ハ草綿一ハ蛮産ゴリて南山志の吉貝ゴ嶺南雜記ハ木綿樹高者數丈葉如白蘋色結子如酒盃 中略 名曰吉貝下云說ハ依て考ふれハ時珍の說ハ今ハ大廣東

新語ハ云へる処ろふてハ大樹とふくふれハ木の如く見ゆ此又ハ依てミれハ前の說と合ひ且花の開く時節各異ゝ正二月開と云或ハ春夏開とゝ然ハ入工開と云此所を見るハ其土地の寒暖ハ因て相違せゝる物と見ゆ　本邦ハ木綿の渡りてハ獲聚國史ハ延暦十八年七月有蛮舶漂流至参河 中略 言語不通使唐人見之曰崑崙人也 中略 請留仍置之大和國弁寺 中略 其貨物有木綿紬傾紀伊淡路讃岐伊豫土佐及大宰府諸列播種とあり此種大竹の品ゴるゝ(草綿ハ)ありさゝへ(木綿の種ふくゝ)此の如く諸國ハ栽て傳さゝハ暖国の品ゆく寒地ハ合さゝゝ亦先年荷蘭人ハ命ありて木綿種を持来ゝ蒔ゝ皆枯とゝつゝ此ゝとゝふれハ本邦ハ木綿樹ハ生育せゝゝ草綿を傳ハ栽ゝ苗の高さ丈餘ハ至る種子ハ小ゝて小豆の如く褐色あり毒常の者ハ子円大ゴゝて色黑く綿と子と粘ゝて離れかゝゝ故ハ紡車ハかけて梗を去ふ蛮種の子ハ綿と自ハ離れて綿も毒常の者より強く布ハ織て益あり とくゝり此品 南山志ハ云る物と同物ふゝゝ

同

有年の物の麻葉あるなく其花色鮮かなれ葉も亦全形を
かさるなく鮮かなれ実の形蓮華に似て開くときは中
より葉を吐れ実円にして小豆の如く褐色なり

同

トヽ子ウスに
載る圖藤蓐
に似て先き三
四瓣に開き中
ます綿を吐せり
實は円くして小
豆の如し

同

栗本氏の図
にして其形大麻
の如く互生す
て一莖七葉を
ふせり其花の
形状は詳ならず
此頭書次ノ図上
ト交換スベシ

同

文政元戊寅の七月木綿の種を得て地に下れに十日を経て見割葉 草木実より初て出る葉を生れ形二葉對生し草綿の苗に似て尖り数日を経て一葉を生れ形桐の葉に似て光澤あり又一葉を生れ形牡荊或ハ大麻の葉の如しこれ全葉にて其後裏に向ひて遂に折り

同

同氏の圖にして
実の形蘿蔔に
似て大に二瓣に開
き中より綿を吐せり

同

同氏の圖にして
琉球に生ずる物
とつたり葉の形前
条より大に廣く
厚しとつたり

一種

フウシトウトス蘭
名

天保十三四の間荷蘭より種渡り江戸にあり樹の形雞冠に似て細く円く硬く宿葉の嫩芽を生ずるとも五葉の形も雞冠に似て大小長く面に光澤ありて夏秋に枝の末に出し枝の梢に数花簇生して一花の形紅色にして六瓣をなす円く開くときは下に垂る蕚葉色紅なり数本植て上に向ふ花枝生ずる結ぶ形薩摩りかく開くときは中に蕚を包れ赤薩摩の製の如くなり故人名とし成し難し唯佛と呼て用ゆるなり実も又薩摩に似たり

草綿

きわたくわ　わた　家　貝　鬼　吉貝（廣群芳譜）

吉貝花（東西詩考）　白疊子（後漢書引用書年表偶）　子花（嘉西詩考）

花桃（群芳譜実の名）　綿　繭子（東坡宝殿牧甲仁の名）　絨（群芳譜蕚の名）

ヤールしーろ人　ゲルーエシデ　オーみゃんし　ストロイン　蘭

ヤールしーろ人は無名・いろると「りんー　エレゲハ生ちとつくとも「オーム」綿とゝを「スーロー」と蕚とゝるとも毎年もろわく芽ろ

草綿も往古は本邦にふく蕚葉集の蕚紫綿を大綿のもふれの根を大同の頃ろ木綿のもろ」共、錦綿のもとく又類聚国史の綿々草綿ともろは北之これは大綿のもと白河無談に昆布を引て永録天正之間始傳之郡種今は至て僅に百有餘年とす續和漢名数に本邦の人古昔不能衣帛者皆以苧麻為服器文録年説傳其種一帝于天下とす此本邦草綿を栽る始ふるへ」今猶國の繁殖して万民有益の品とす此せし近世本綿の種渡りて本草綿ふきとゝに食土賤民皆麻布を重と宜とい」とまふ土地に宜く四民是苦とする故に高世の利群国の宝となり又云と綿は無毒子の油は微毒燈にともせは目を損とと本草にあり南家此油を菜油にまして食物菜品とさへ分ち是実初夏地に下し秋月に玉り長さ九は高さ三尺許り枝葉対生し葉の形黄菊葵の葉に似て小夏の末すり枝の梢に花を開く形状又蜀葵に似てかく黄色にして蕚の本紅色をふし後実を結ぶ形桃の実に似て先尖り熟れは三つに裂て綿を吐れ其綿の内に実を包む大さ小豆の如くふくと円く褐色之綿と実と離れさる。

如一粒を離れ器を以て別ち綿は日に乾して種実の用とす

一種

樹葉花実ともに
同くして綿葉褐色
のものあり

一種

樹葉共に草綿の如く花
の形に草綿に似て黄紅
色なるものあり

杵木　いぬつげ
ぢんめく　播州
かはらけづう

山中ニ自生多シ又人家ニも多く栽ゆ
枝葉繁茂シ冬青枝ル互生シて大さ
五六分至三分細き鋸歯ハ枝ニ互生
のやくカシて熟るれハ黒色となる別ニ夏
月枝の間ニ緑ニ実の黄きものを生ハちすく

無患子の如く周りニ光をつけ鋸歯なく
これ出の子実ハ黒色成を是又此材の印文櫛
ニ作る

一種

葉の形前条と同じ
大三寸許りなり

一種 らけ

やどめ

樹ふく葉も
小さく二三分許
り庭に栽る小
二品とし

一種

亀甲つけ

樹小く葉の形常の品より短く鋸歯あらく夏五辨の小さ白花を開く

黄楊木　　ぶんそんはげ　つげ

豆外三倉島に多くなりとつへり樹高さ三四尺八戸茎対生し葉ハ柿原より円く大く厚く先回不ふして軍配の如し春月葉の間に薄黄色の小花を簇生し後実を結ぶ大さ指頭の如く頭に三つの角の如き物を生ひ熟すれハ黄褐色となるこれを割れハ中に細き実ありて木理密にして黄色之堅くして印に作り又櫛に作る

一種

くさつげ

樹小にして尺余に過ぎ方莖対生し葉の形ぶんてんつけに似て至て小く軟に長き三分許りにして先凹を引て ぶんてんつけの如し

不凋木　一そんのむめ　ソしむめ薩州　いそのかうかね

石寄生和名　雪裏紅中山貞問

深山岩石の間に生ぜ樹自ら屈曲して直立せず葉は蜀樹の葉に似て小く深綠色にして光澤有り四時凋まず夏月葉の間に絶を生ず五瓣白色の小花を開く形梅花に似たり藏器の説に生大白山暴谷葉似槐く云ふに因て此物を充つ恐くは花のことを云ふ此は的當ならずを知るとゆへとまの矣に載て後の考を云つのし

和産あり琉球より来る暖園の産也
冬月ハ雪ニ藏されハ必見枯る樹高
さ三四尺円莖対生し葉の形梔子の
葉ニ似て厚く夏月枝を梢をハ数
花を生ず形丁香ニ似て蒂細く長く
開くときハ丹紅色ニ実ハ結ぶを難し
一度花散されハ又枝を生し花を開
く中秋まで花尽るをやし

賣子木

さうんたんくハ

山大丹 廣原新語

木天蓼　わたゝび　和名鈔 本草和名　まこゝび　なつむめ

たんさうのき　蓬莱金蓮根　野菜博録

比鬼根　本草和名 引書論

深山に生ぜ今人家にも栽む蔓生の如く枝軟弱にして木上に延引し年久しきものは樹の如し円莖対生し葉の形藥に似て軟に淺綠色にして背面ともに軟き毛葬あり周りに細き鋸歯をなし夏葉の間毎に莖を生て二三花を開く五辨白色にして形金絲梅に似て大さ一寸余中に実の形をなして本の周りに黄蘂を生じ実の頭に白き葉を生ぜ実長さ九ハ形砸の実に似て内に細き子多く呼い辛し一蘭山の説に花既に開きたる者をれあり小ふくれて実の如くなりたるあり今解にして莽草実の小ふるが如く是即蓋瘍にして虫の巣なり切れハ内実して色白く蘿蔔を切たるが如く内に黒印ありと云へる栗用

小ハ真の実を用ひへし春月嫩葉を食用ともへし味辛ケて蓼の如く此根葉花実ともに猫蓼好て採食ふ実を火に焼ハ遠近の猫及ぼ集りて其香をうきて悦ふを甚し

小天蓼　集解　たんちんくハ

暖國の産なるなく寒を恐る冬月ハ窩に藏む樹小にして高木とおもひ葉ハ山梔子に似て長く光澤あり枝葉對生し夏月梢に枝を分ち五辨黄色の小花を開く花の傍に三白草の如き白色なる栗一枝に一葉つゝ生せり

小天蓼

接骨木

にはとこ　だつのき　きだつ

みやつこのき 延喜　またこのき 上日

またぶのき 近江　たもうつぎ 仙台

扞々活　本経 陸英

樹葉花実ともに皆蒲萄に似たりかへすにつるいと山中に自生多
く人家にも多く栽ゆ樹高さ丈余にもなる春新葉下に生じ随て蕾を
生ず春の末花を開く数百簇生して五弁の細く後実を結ぶ小豆の
如く秋の末に至り熟して紅色となり冬月高樹にあり此木を焼て打
身の薬となる

霊壽木

和産詳ならず拂林に舶来の物あり疵瘤多く生して杖とするに宜しき
物は今在る処の物多くは刺し製する者多し

椵木　たなのき　たゐらのき　ゆかのかへでる　州䕫

たら　州防　とりとまらん　かわとらとまらん

うどもどき　鳥不宿　八遠　鵲不踏　豉花　時珍

山野自生多し一幹直立して大なる物は丈余に至る梢上まで梢上まで
大ひなる刺を生ずること甚し春梢に嫩芽を生ず此芽をとりて食ふ
味ひうどに似たるゆへうどもどきといふ又鹿此芽を食ふて角を
解くといふ葉長さ一尺許り葉の茎三尺許り一葉の大さ二寸許り一
茎数葉を生ず葉の表に面背刺を無きにあらずして甚し夏月穂を
生じ枝を多く分ち小白花数百簇生す後小さき実を結ぶ熟して
黒色となる

本草圖譜卷之九十三目錄

寓木類

茯苓 まつほと 一
白茯苓 こくかくれう 二
赤茯苓 せきかくれう
茯神 ふくしん 三
琥珀 こはく
明珀 めいはく
物象珀 ぶつしやうはく 集解 四
一種 血珀
蠟珀 ろうはく 集解 きんはく 五
鑿 ちつさいはく
豬苓 ちよれい かしらまのまき 六
同

雷丸　竹苓 釈名　七
一種　桑上寄生 やとりき　八
松蘿 まつのこけ　九　一種 ゑのきのやとりき　十
一種 つけまつ　十一　一種　十二
一種 あまるゑのやとりき　十三　一種 ちかつのき　十四
一種 やまやまし　十五　楓柳
桃寄生　柳寄生
古斯　石刺木

本草圖譜卷之九十三

東都　岩崎常正　著
男　岩崎信正
門人　小山廣孝　校

寓木類

茯苓 まつのこ 和名鈔　まつのおや 阿州　おや 同上　茯苓 通志畧

浮水之髓 本草和名引大清經　浮水玄靈之隨

終神之伏胎　太一紫粉　元氣

玉英　太一遺生　天精 共不同上　更生 外臺秘要

神丹 本草和名引神仙服餌方　松髓 同上引兼名苑　木威僖 同上

絳晨伏胎 酉陽雜俎

松の精氣土中に凝て塊をなはるものを故に黒松赤松にあるべきには大樹を伐二三年にして生ぬ兩松とのに生ぬといへども黒松を多しとなはといへり大松の株を集解に茯苓楔といへり他木は根上より伐は又科條を生ぬ松樹は然さるゆへ其氣土中に横に走りて其上りに草木岩石あれは止るものに寄て塊を生ぬ也其形定ぬ或は尖り或は円く或は平く或隋円をなせり松樹を斫ぬして伏苓を生ぬるを稀し其初生の物は軟にして一二を經て漸く大に甚大なるものは八九尺周余に及ぶ大抵周り三四尺の物多し蘭山の説に六七年以後十年に至ましを堀り採る物を上品とは五六年の物嫩小にていまた堅ぬは十年以外は虚大にて皆良なるにはと云又赤松には伏苓を生ぬれども少し赤茯苓なりと云出る処和州及び長州雲州筑前薩州近國にては常州より出ぬ上品なる物は片苓を燈火に映して内にくりりなし今藥店の物は水に浸ぬと数十日にて軟になるを製ぬる也性氣虚となり甚悪く此全く其切り易きを以て其堀り採の具は火筯様にて大なるもの又丁の字の形の柄にて穂を鐵にて造る物を以てへき粘汁ありて茯苓の氣にあるを驗として堀り採るよしいへり

白茯苓

外皮黒褐色にして皺をなし六七年を經る物堅く実して白色透明なるものなり藥用には寸余の厚さに切たる物を以て其性を見るべし此を片苓と云物日に映しくりりなきをよろしとはくりりあるは腐たるものなり

赤茯苓

皮の色前条と同じく内に赤色を帯ふる物と此品は年の経るものなるべし

茯神

松根を包て生ぜる物なり其包まるる松根を神木まるまれ黄松節（二名伏神と云形の次条）状定に其形茯苓と同じ集解に根を離れざる物宜しといへれども本邦にては下品の物とは此理はいつまで未其真を論ぜる物あれば茯神といへども毒木の根を包む物は必ず毒なるべし其処に由て何木によらず包むべし宜しく擇むべし

琥珀 くり 和名鈔

虎魄 本草和名引兼名苑　江珠 同上

明玉神珠 同上引丹口訣

松精 名物方言　大蟲魄 外臺秘要

虎珀珠 同上　シユクシーニロム 羅甸

ハルンステーン 荷蘭

明珀 集解

集解に松脂入地千年而成と云或は茯苓千年にて化と云或は海松木中津液と云或は楓木脂膏所化と云或は桃藩化といへり本草彙言に楓脂珀桃珀を載せ惟東南海外諸木脂化珀者有之西北方無有也と云り琥珀を以て火に燒は松脂の香ゆゑ故に藻土にそれは松脂の化する処といへるなるべし本邦南部久慈村の産は山に樹木なし燒山の如き処にして石の間に長く脉理の如く續てあるを穿出はといへり西湖の説に藥店の薫陸は多くは南部をそれ山より出る所の琥珀をそれ山は一山盡く岩石にて松樹はたゝてあるとなし岩石の間より石の脂流れ出て凝て琥珀となるべし下総銚子の海中にも琥珀を産はることあり六月汐干のとき捨ひ採るありいへれも

物象珀 集解

象物珀 本草彙言

色紅黄色にて透明に中に蟻又蜂ホの自然に入りて生るゝ如きものなり

形状一なるに多くは氷糖の如きものなり時珍の説に色紅而且黄者といへり淡紅にて微し黄を帯透明なり

松脂の化する処ろにあらはれ焼ハ臭氣ハ石脳油と同じをなりといへられによりて考ふるに琥珀ハ石脳油の凝結し塊をなしたるものに疑ひなし近年蘭人持来る石脳油の内に色白き物あり透明の琥珀ハ決して此色白き石脳油の化したるものに職方外記にハ外國の海中より琥珀をいふはといへり銚子海中より琥珀を出はと符合は又天工開物にハ琥珀を以て寶石の部内にいる並に琥珀の井中より出るをもて氣たり此等の説にて考見るときハ琥珀ハ松脂の化したるものにあらはれ石の脂の化したるものなるとこゝ琥珀ハ

一種

血珀 本草彙言

色深紅如血色と本草彙言にいへれども紅黄の物なりつゝ

舶来の物を上品とは金黄色にて透明に松脂の凝りたるが如きものなり中に蜂蟻蠅蚊の類を含みたるあるとなりとも云中島の説に紅毛ハ近年持来らはれ漢渡の物なりといへり其形状並に大小一ならはれ大なるものハ人物鳥獣ホ乃形を割ひて珎重となはれ下品の物ハ薫陸と名つけ持来る本邦にても改めはして薫陸となし賣用はれ真の薫陸ハ乳香のことも混ひ云へなるは

蠟珀 集解 きんそく

集解に色黄而明瑩者名蠟珀といへり

堅

くろまんそく

漢渡の薫陸とあれ物の内にある深黒の物へ形状松脂の凝たる如く本邦の物は奥州南部より出る琥珀の中に深黒色なる物あり此なり蘇恭の説の木堅は石炭なりこれいしまことといふものなり

竹苓 釈名

志村竹因に載る処る其形荀に似て皮ありて内は実して猪苓に似たり これ茯苓の生はると同物なるべし蘭山の説に先年遠州金谷にて堀り採る物塊大にて色白く軟なり形状茯苓に似たり阿州よりも出せりといふ

一種

同氏の図其形茯苓に似て紅黒色にして本に竹皮あるとなり荀の化したるものなるべし

豬苓

漢渡の物

かきたき 本草和名 き 同上

たきたわど

あつまいさけ 南部

おゐのかふらそ 相馬

集解に云ハ楓樹の根に生ハ也と云又他木の根にも生ハ也あれども本邦にハ楓樹少く他木の根にも豬苓を産ハ也ることを見ハ日光山獅子の淵に産ハ其生ハ也上にハ菌を生ハ土菌の如しと云り

田村の説に下野宇都の宮萩多き處に産ハ也とし故にたきたわどと云るよし蘭山の説に丹州及び豬州皆出ハ山中或ハ河の堤の地を堀りて出ハ也とし漢種の物外黒白色にて肉白く竹の朽たるの如くて実せり

和産の物ハ漢土の物より黒く肉の色ハ同くて形状大小不同なり

雷丸

舶来の物にして其形豬苓に似て小く大なるものは栗の如て小なるものは無患子の如し多くは零除子の形状に似たり外皮黒褐色にして肉白く実して堅し本経逢原に皮黒肉白者良赤者殺人と云へり薬舗にて大風子を雷丸と云其油を雷丸の油と呼び用ゆるは誤りなり

桑上寄生

やとりき 和名鈔　わや 同上　やとるわや　とゐき 讃州

かぶはのうへき 防州　てんのさて　とゐさて 江戸　寓屑 事物異名

寓童 同上　桑樹上羊児藤 医学入門　桑絡 同上

附枝 本草和名引兼名苑

桑樹の上に生ずる寄生なり隠州肥後薩州雲州等より産ず年を経る処の桑の大樹には自ら生ず形加條木の寄生と同じし葉大にして黄緑色枯落にすれば節々より脱落して黄色なり冬月といへども凋まず枝必ず両種をなし並同し秋月節の間に円き実を結ぶ大さ胡椒の如し熟して黄色となる始生するとき皮より芽を生し長ずといへども別に根を生せず他木の氣に従て長生ず是蘓恭及び蘓頌の説ところの物これなり蘭山の説に薬舗にて多くは和州より對の櫻寄生なり桑上の者は枯て枝葉ともに黄色之他木の物は緑色にして黄なるは故に黄色に染て偽るものあるといへり八丈島より猢猻眼を出ず又豆州三宅島より女桑にとり出ず二品ともに桑寄生といへども甚非なり

桑寄生

松蘿 まつのさいけ 和名鈔 さるをかせ 同上 さるのをかせ 阿州

やまうそのかんまそ 同上 くものこなみ 日光 くもあか 甲州

榼蘿 事物甜珠 藤蘿 秘傳花鏡 蓎蒙 正字通

野州日光山甲州身延山其余高山にあり松樹又諸木に粘して生じ形状絲の如く木に着く処は太く枝を分ち数条をなし長きものは三五尺に及ぶ風雨の時自ら落下をなし

一種

ゑのきのやとりき

生ける形加條木に粘着けること桑寄生と同じて青色なり実もまた同じ桑寄生の集解に諸木に生ける物といる物なり

一種

つけまつ

桑寄生の集解に
松上の物と云此物なり
遠州に多く赤松にハ
多く黒松に少し此物
松樹に粘着し別に
根を生し枝を纏ひ
節よりも根を生ハ
葉ハ黄楊に似て長
く厚く深緑色にて
光沢あり四莖對生し
夏月筒様の紅花を
開く形蔦蘿の花の
如く先き四辨に分り
葉四時とのにあり
凋まれ

一種

形状前種に似て葉大にて女貞の葉の如く花も前種の如し

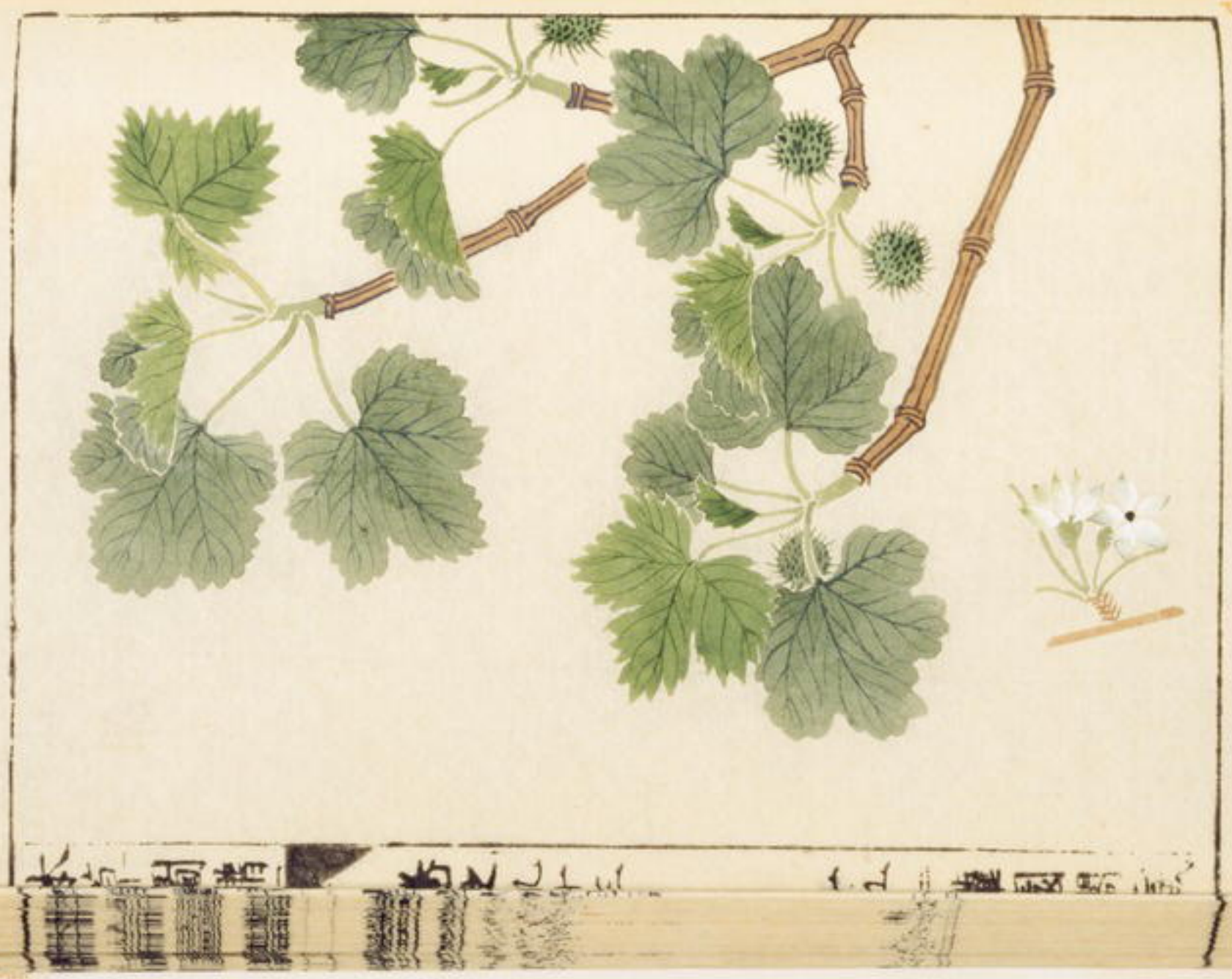
一種

あまなろうの
せとりき

生ほう形桑寄生と同じく樹より生く淡紅白色にて枝の先に淡紅の星あり

一種
ちゆうつのき
そうつのき
生ぬる形前種に似て
青色又染寄生に似
て葉ふく此物枝小多
く生ぬ

一種



器やとりきとゝへとも寄生にあらはれ野州日光山に多し又諸州にもあり朽木のうろに生ぬ前種の寄生と異なり葉は山蘇樹に似て小く又きひとりこ丸平らこにも似たり又牝牛児苗の葉に似て厚し枝葉とりに互生し夏月五辨の白花を開く形梅花に似たり実小き囘く長き五分許りにして毛刺あり形状蒼耳の如し熟して赤色味ひ酸く蘭山は鄙樵雨雅註の蔦に充つ

楓柳

和産なし本邦に楓樹ありといへとも未だ寄生を生せざるを図せる能われ

桃寄生

集解なし楓柳の集解に因て考ふるに桃樹のうろに諸木の生ぬる物なるべし

柳寄生

前条と同しく集解に詳かならされとも柳樹のうろに生ぬるものなるべし

占斯

いらむしの名蛄斯と木ゝるなく木占斯と釈名に註せり田村の説に肥前薩州にまれにありといへるも形状詳ならざるなく図せれ

石刺木

不詳

本草圖譜卷之九十五目錄

苞木類

一種 なんしけ 一
一種 ねざし 三
一種 寒山竹 五
鳳尾竹 集解 七
一種 ふんおさし 九
一種 十一
箭竹 集解 やれけ 二
一種 通絲竹 四
一種 たかしの 六
一種 金糸竹
一種 しやはしんちく 十
一種 しらくさ 十二

一種　かんちく
一種　へつかうちく
一種　亀文竹
一種　相思竹
仙人杖　たけのまゐれ
一種　さゝうを
雜木類
淮木
龍絲竹 集解　十四
暴節竹 集解
一種　螺文竹
梭竹 集解　ふねちゐく
鬼齒　こけのくちね　十九
天竹黄　たけしを
城東腐木
東家雞棲木
厠籌 附錄
震燒木
古厠木
古櫬板
河邊木

本草圖譜卷之九十五

苞木類

東都　岩崎常正著
門男　岩崎信正
門人　小山廣孝校

一種
あたけ
ふいたけ
かもたけ

山中又原野堤に
多くあり根水中
にありても腐れ竹の
形軟りにして直に
節むきく節の間長
きもの二尺余に及ぶ
葉は若竹より厚く
大なり初生は白き粉
不一生は此竹諸の器
物に造り用ゆ一種此
物より細きものを去
のたけと云又器物に
造ならん

竹の形めれけに似て
細く圓原く節ひく
節の間二尺許り
葉の形又めれけに似
て大く厚く其竹にて
矢を造るなり

筒竹 集解 の 和名鈔 やたけ

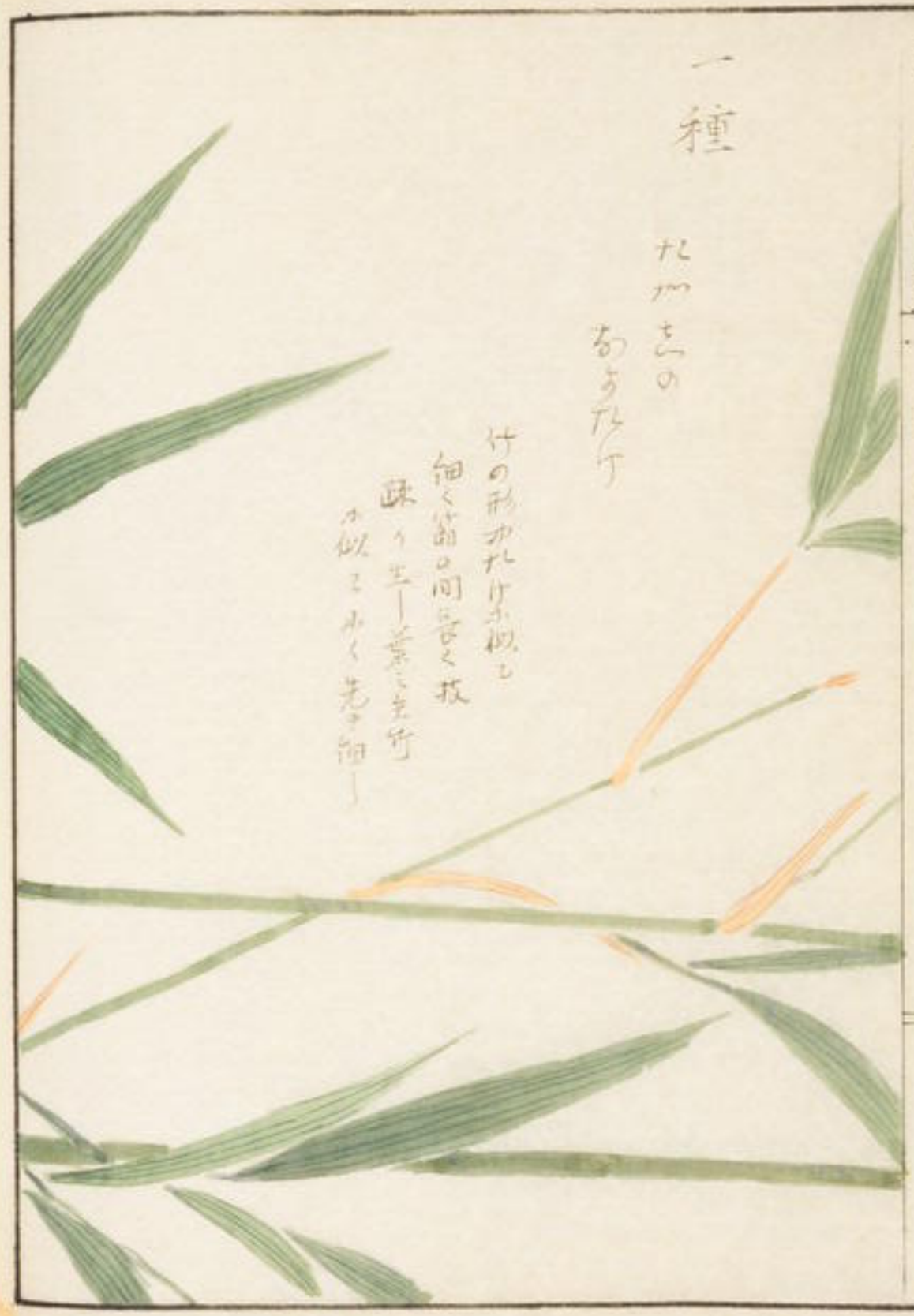
一種

通絲竹

竹の形矢竹に似
て細く葉の形迎
葉竹に似て下葉
せば上に向へり

一種 寒山竹

竹の形やたけに似て細く直にあり葉末に多く生ず形又かたけに似て至ってふく直之


一種
たかしの
あらたけ
竹の形かれけに似て
細く節の間長く枝
疎く生し葉に至竹
に似て小く先の細し

鳳尾竹 集解

人家又盆種にして玩賞尾竹の形かたけに似て堅く細く庭際に栽るものは高さ五六尺小盆に栽す物は五七寸に至る葉は短くして形極の前の附に似たり夏月土用に筍を生ずるなく土用さけといへり

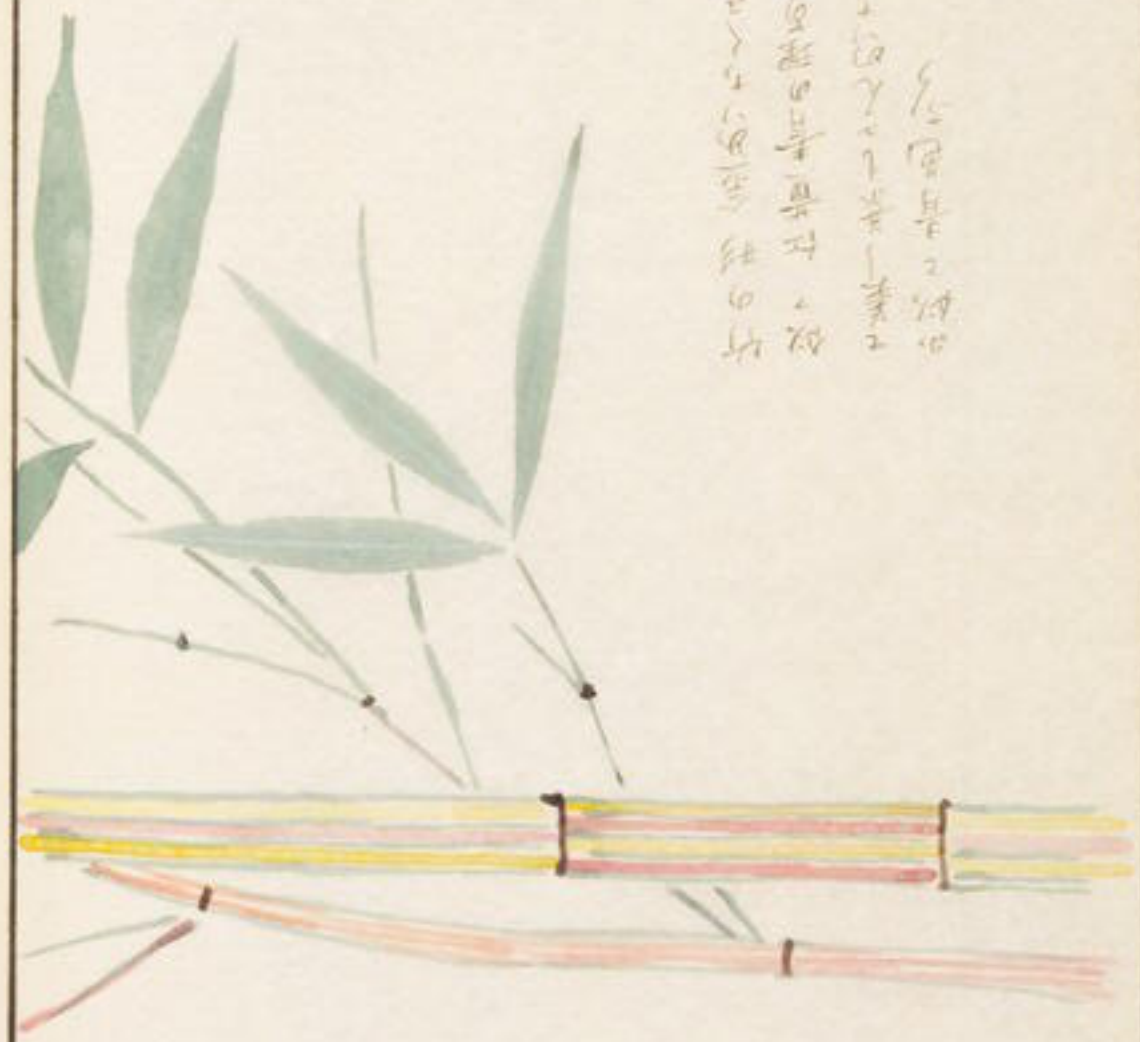
鳳凰竹 花戸

土用たけ

しゃんぬうちく 土瓦

さんしゅうたけ 福瓦

こぎんちく 薩瓦



蝦夷の産なりとぶつり
竹の形のたけに似て細く
高さ五六尺ゆ三八寸有く
二年にして紫色の斑あり
葉の形若かに長さ八九
寸幅三寸許り此竹にて
煙管を造る

一種 べつおらちく
しゃおたんちく

奥羽白川 杜鵑山 雷神
の社に産する処の物と云う
楽翁君の庭中に種々る竹の
形めれけに似て細く紅紫色
の斑あり茅の形矢竹に似たり

一種

一種

かんちく

人家多く栽て籬
とぶに竹の形かれけ
ゝ似て細く節高く
間旋く肉厚く長れ
るとの高さ八九尺皮
落るとき紫色とぶ
る葉の形若竹ゝ似て
ふく薄し

龍絲竹 集解

龍絲竹 竹譜詳錄

龍須竹 同上

高さ一尺許り葉至て小く細く蚕載とおなじからし

一種 べつかうたけ

志村竹圖に載る処る駿及藤川木嶋郡に産に囲九寸宮ありて べつかうの如き班めりといへり

暴節竹 苦解

節竹 同上

ちぐれけ

鶴膝竹 竹譜詳錄

木槌竹 同上

鼓槌竹 同上

和産あり同氏竹圖に載る処る多紀六本に舶来の藏品ありといへり節甚高く鶴の膝の似たりせ此名あり

一種　亀文竹

同氏竹圖に載る処る琉球の産ありといへり圍尺をかゝり節亀甲紋をおせり此佛面竹の類にして奇品あり

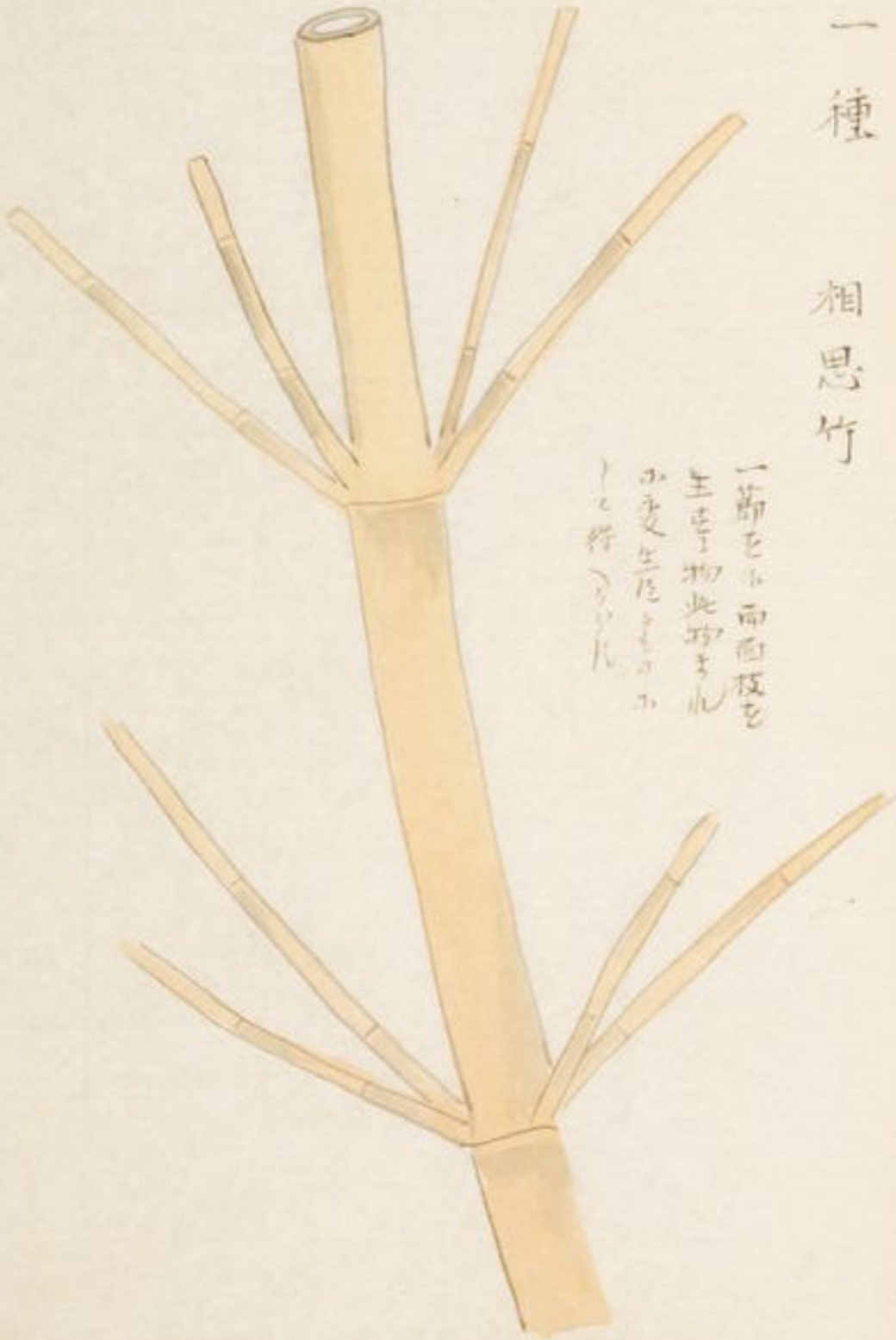
一種

螺文竹

同氏竹図に載る処竹の形
一幹盡く此形なる所は
[illegible]根上二尺の間にあり生ぜし
偶の変生あるものは葉と得べからずと云り

一種

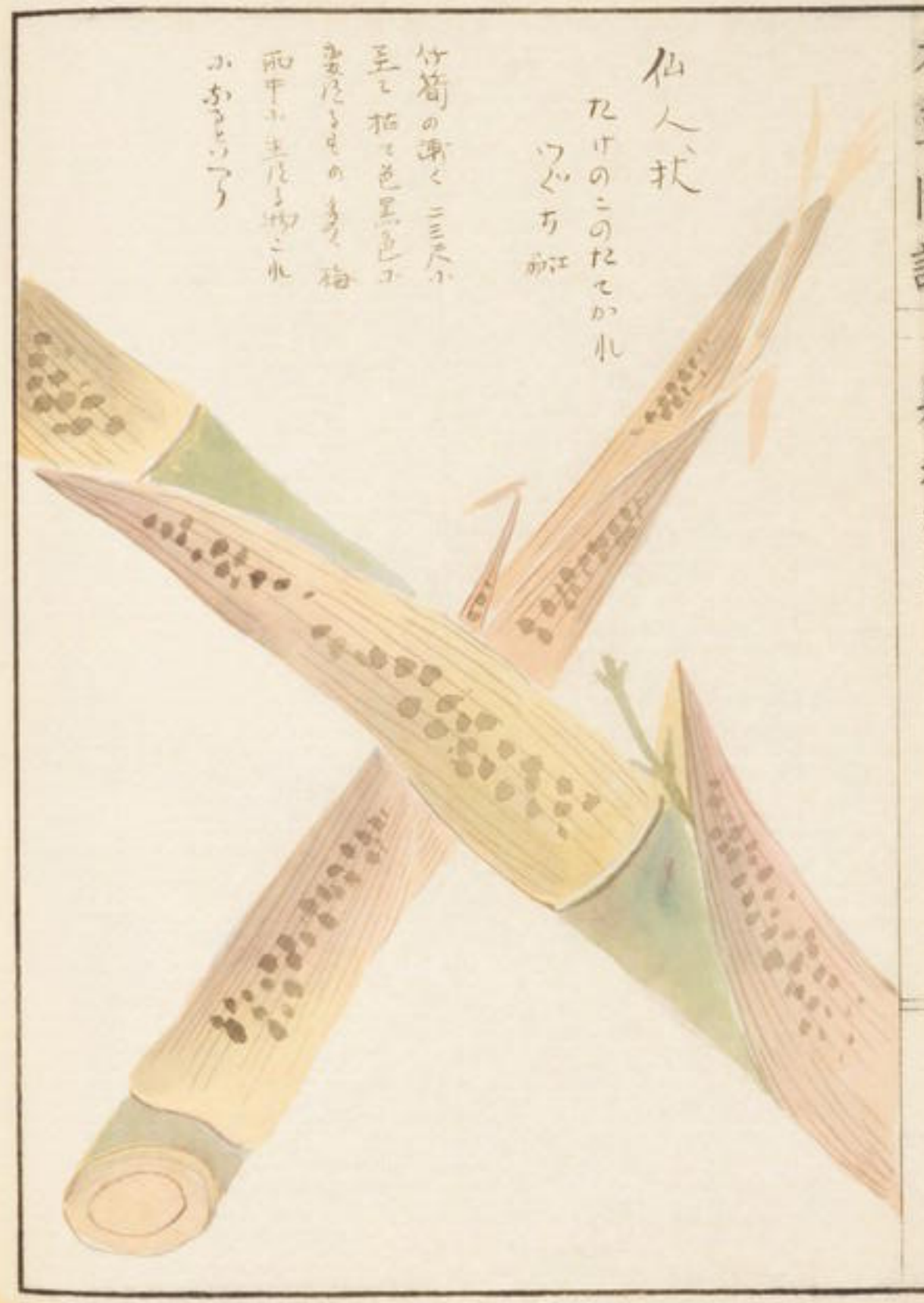
相思竹



一節を以て両面枝を
生ずる物此物まれ
に変生したものに
して得べからずと

梭竹 集解
ちゆろ
ちく

梭桐竹
竹譜詳錄
幹の形梭桐の如く小して無し細く甲
実し葉も又ちゆろに似て少く葉
の本に褐色のもある根も苗を生
一種高さ四五尺に至るものとゆね
ちゆろちくと云 故に造ル


仙人杖
たけのこのたてかれ
つぐち 江戸
竹筍の漸く二三尺に至て拈て色黒色に変ずるもの多く梅雨中に生ずる物これにあるという

鬼蚩
たけのムちね
竹根土中にあって腐朽したるものと

一種　さうを

奥尾竹　竹譜詳錄

志村竹圖に載る処飛鳥丹布川の近辺に生じ細き幹ひつゝ蘆葦に似て柔にして折易く葉大にして笹の葉の如し葉の本より黄に似たる物を生ず此物人珍として採り諸外へ送ると云ふ

天竹黄　たけミな

菊山の説に苦竹淡竹皆あり初ハ水之後漸々凝て粉とかゝる数品あり塊をなし竹中に満たるもあり碎く沙の如くふるものと細にして粉の如きを呼ひ白色牙色黒色黒褐色の等ありて牙色にして微透ならるものを品とし舶来の物にて疑物あるとゝ宜しく擇ひ用ふべし

雑木類

淮木

古城中の用ひ古しなる処の柱也

城東腐木

城の東の方にある腐柯の木之東に限るハ東墻上の浅に同じ朝日不早くうくる故に薬用となれ之

東家雞棲木

東の方にある雞のとまり水之東家と称するハ前条の意と同じ

古厠木

せつゝんに用ひし処の古き材也

厠籌　所録　器物類に本條あり

古槻板

古き棺の木をや捕等を云ふ古き物を用ひ

震燒木

雷の落て燒たる木を云ふ

河邊木

川の端にある木へ

附錄諸木あらはしへとも詳ならさるゆへ記さ

本草圖譜卷之九十四目錄

苞木類

竹 たけ 一

竹根

竹瀝

若竹 日上 またけ 三

一種 五

一種 ふたまたけ 七

竹葉

竹茹

淡竹 集解 もちく 二

一種 かしらけ 四

實中竹 六

一種 斑竹 八

一種　くまたけ　九
一種　おきちくたけ　十
一種　きんめいちく　十一
一種　おわらんちく　十二
一種　孟宗竹　十三
一種　人面竹　十四
一種　不ていちく　十五
一種　方竹解集　ちうくたけ　十六
一種　ちりしりたけ　十七
一種　琉球竹　十八
一種　天明竹　十九
一種　唐竹　廿
一種　麻手古竹　廿一
一種　迎蕃竹　廿二

本草圖譜卷之九十四

東都　岩崎常正　著
男　岩崎信正
門人　小山廣孝　校

苞　水類

竹

たけ　和名鈔　かしたまりつき　藻海草　藏玉集　寒玉　正字通

緑虎　本草和名　引兼名苑　草華　同書引養性　栗集竹筍　此君　第物異名

抱節君　同上　妬母草　同上　戸魯孫　同上

化龍枝君子　上月　青士　上月　華章　廣東新語

比封君　典籍便覽　カメーン　畫名　ベンプウス　畫語箋

漢土ハ竹類甚だ多く本邦ハ少し其内東北の国ハ至て少く四国九州ハかりといへども漢土ハ及ハれ集解中ハ載る品ハ詳かなるものハ以下図の上ハ名を出て詳かなるものハ別ハ名不出されハ亦本邦の品ハ漢名と合するものハ和名のミを出れ薬用ハ漢竹を上品と可し苦竹より以下の物ハ次とれ其中ハ薬用ハ成ふさるものなり然其奇品を出れのミ凡竹を種るハ五月十三日を以てよしとれ漢土ハ辞日と名く雲笏ハ筍の旋生と云ふ竹ハ実を結ぶ集解ハ六十年一花と云しといへども今考ふるハ竹の根甲をするときハ毎年花実を生ずるを以て培養しつ竹の根を新ハ出るときハ甚ずるとなりよく養ひんとおれハ五六年ハ一度つゝ竹の宿根を拓去るをよろしとなれ

竹葉

薬用ハ淡竹苦をよろしとなれ右とも二品とも氣味別なるを集解ハ詳かなり

竹根

薬用ハ右の品と同し

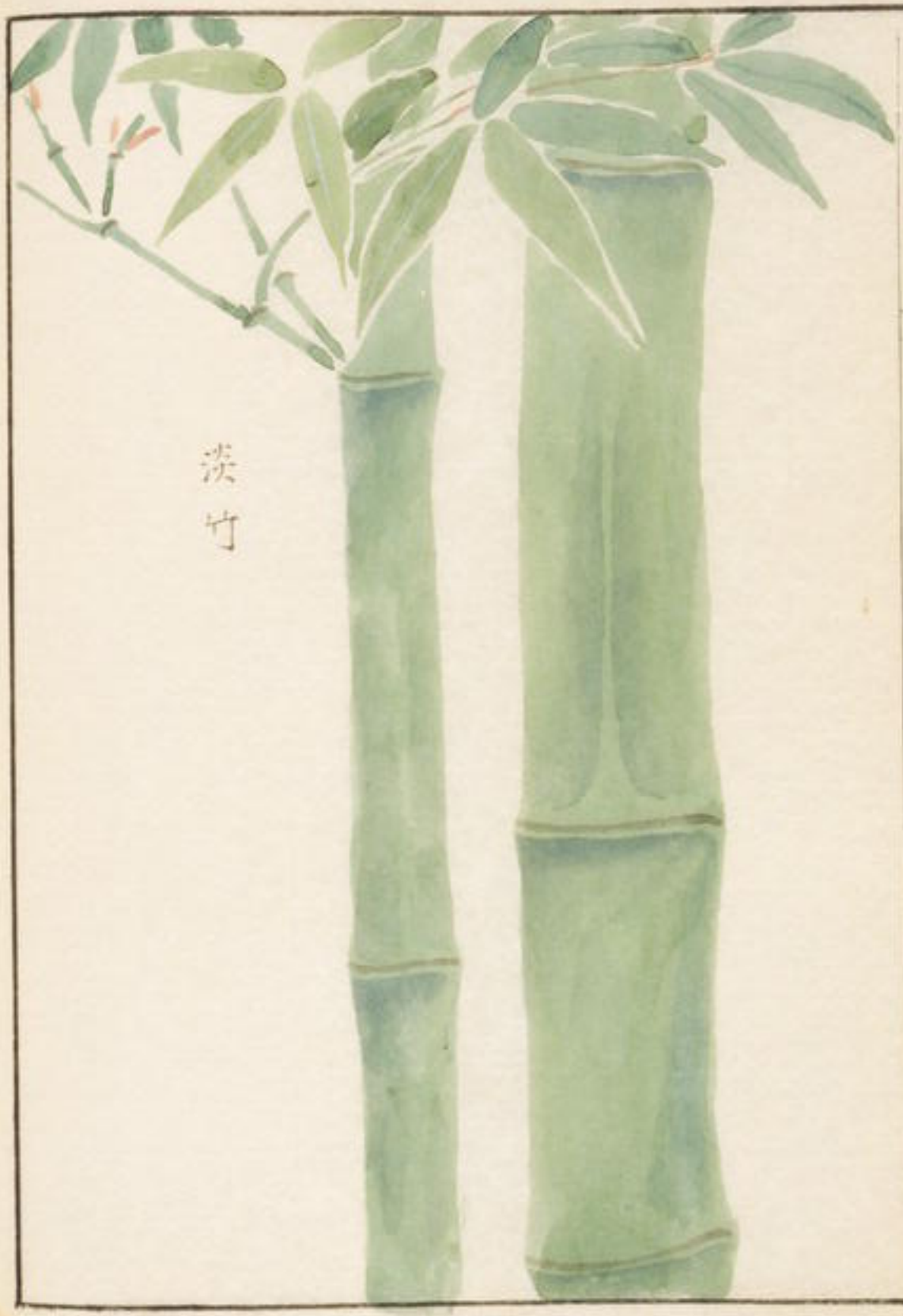
竹茹

薬用ハ右の品と同し茹を製れる事青竹を採て青皮を削りて用なへし

薬店の品ハ多くハあまかせの物なるを擇ひ用なへし

竹瀝

薬用ハ右の品と同しく青竹を割て火ハ炮り油を取り用なへし



淡竹

大和本草に淡とハ若クかさるおりといふ
諸國に多く種竹の形若竹より細く質
直にして用ゆる宜し筍ハ若竹より早く
生ず皮に斑紋あり褐色なり葉ハ若竹に
似て長さ三寸許り

苦竹 集解

まだけ　くれたけ

竹の形状淡竹に似て太く大なるものは周り一尺四五寸に及ぶ高きものは三丈余に至る筍は淡竹より晩く生し皮に斑大あり其大く民用に利あり筍の味ひ苦し

一種

合歡竹

竹譜詳錄

志村藏書に載る
圖昔年巢鴨或人
の園中に生ずる品に
して竹の形苦竹に
似て根の上五六節
より四五本に分れ其
一本より又兩竹を成り
梢に至り七八本とおれ
り高サ七八尺に過ぎ北
品稀に生ずるものなり

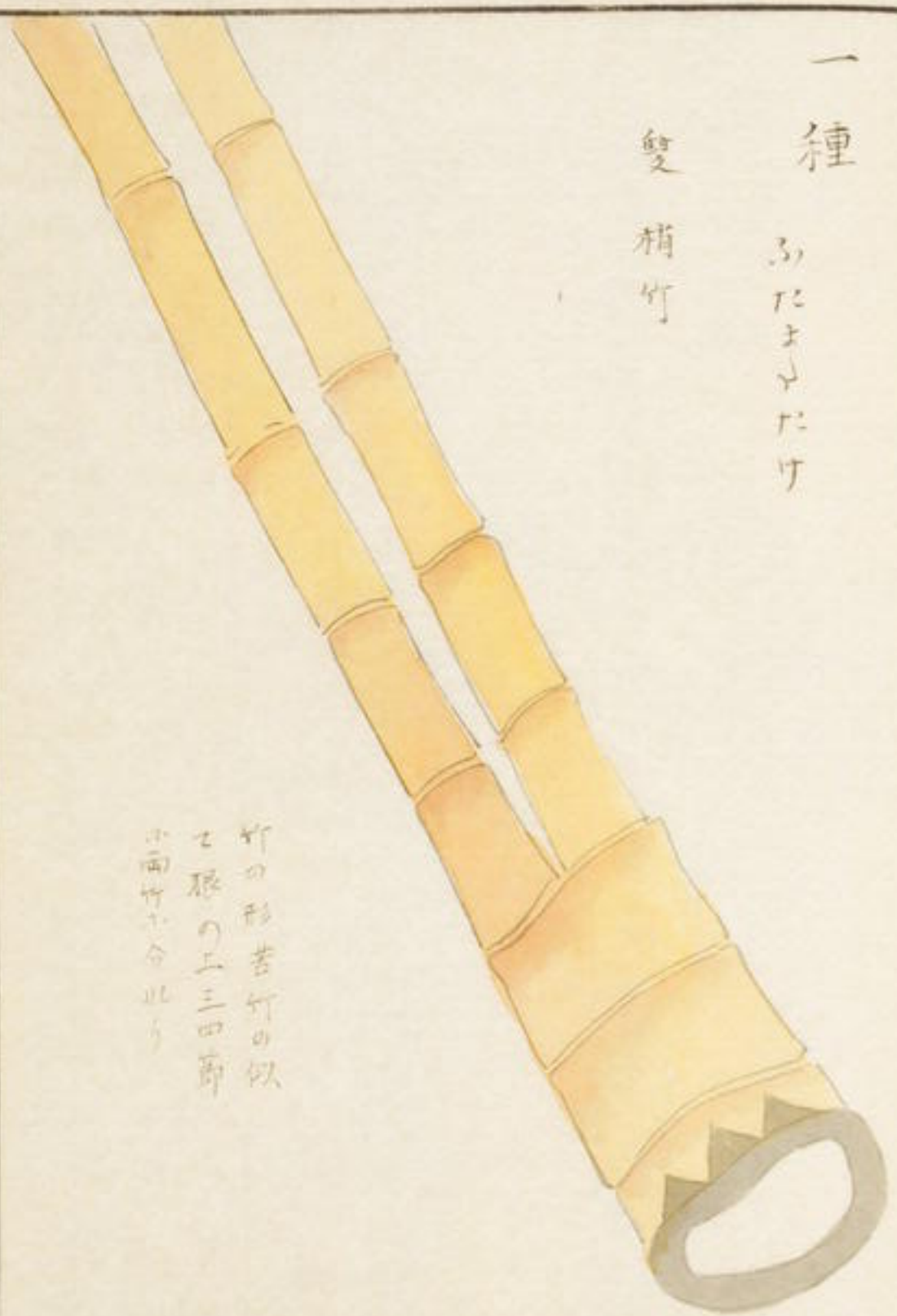
實中竹

實心竹 和名　實竹 竹譜詳錄

阿品一字山に産ほとゝぎり
竹の形苦竹の似て節の
間短く心実して穴おく
舶来の品ハ大なるものあり
とゝぎとも和産ハ細して径寸余
のものゝ

一種　ふたまたたけ

雙梢竹



竹の形苦竹の似
て根の上三四節
に両竹に分れり

一種

斑竹 和名

丹州亀山に産出る品にして
高さ一丈余に至り葉の形状
まれけに似て竿に黒き斑あり

一種

ごまだけ

處々にあり竹の形状苦竹に似て
堅く徑一寸余に及ぶ初生は青く
年を経るものは黒紫色の斑を生
ぜ杖とおし又傘の柄に用ひ蔵
頌の説に苦竹有紫と云るものに
ふへし

竹の形状苦竹に似て細く漸く徑り
寸許り葉の形状も苦竹の如く香色の
節あり甚だ美なり

一種

おきあれけ

本草圖譜 卷之二十四
一種
きんのいちく
黄金間碧玉竹
竹譜詳録
竹の形状苦竹に
似て太き断く三
寸許り枝の附く
処は深緑色なれ
外黄色にして枝も
細き処は黄色なれ
黄色にして美
くし

一種

孟宗竹 和漢通名

雩竹 竹譜詳錄

江南竹 八岡通志

元琉球より渡るといへり諸国多く種々筍を實に竹の形状苦竹に似て白こゝありて節の間短く肉厚く質軟かにして香ゆゑやすし唯花瓶之筆筒に作る筍は苦竹より小く軟かにして薄し

一種
人面竹 竹譜詳錄
鬼面竹 上月
佛面竹 上月
佛眼竹 上月

竹の質孟宗竹に似て節の形状亀甲をなし半ば上ハ常の節の形なり長さ北ハ高さ七八尺に過ぎ太きものハ徑三寸許りに至る葉の形も孟宗竹の葉の如く

一種

おていちく

おごんちく

琉球たけ

人面竹 本草彙言 薑竹 竹譜詳錄

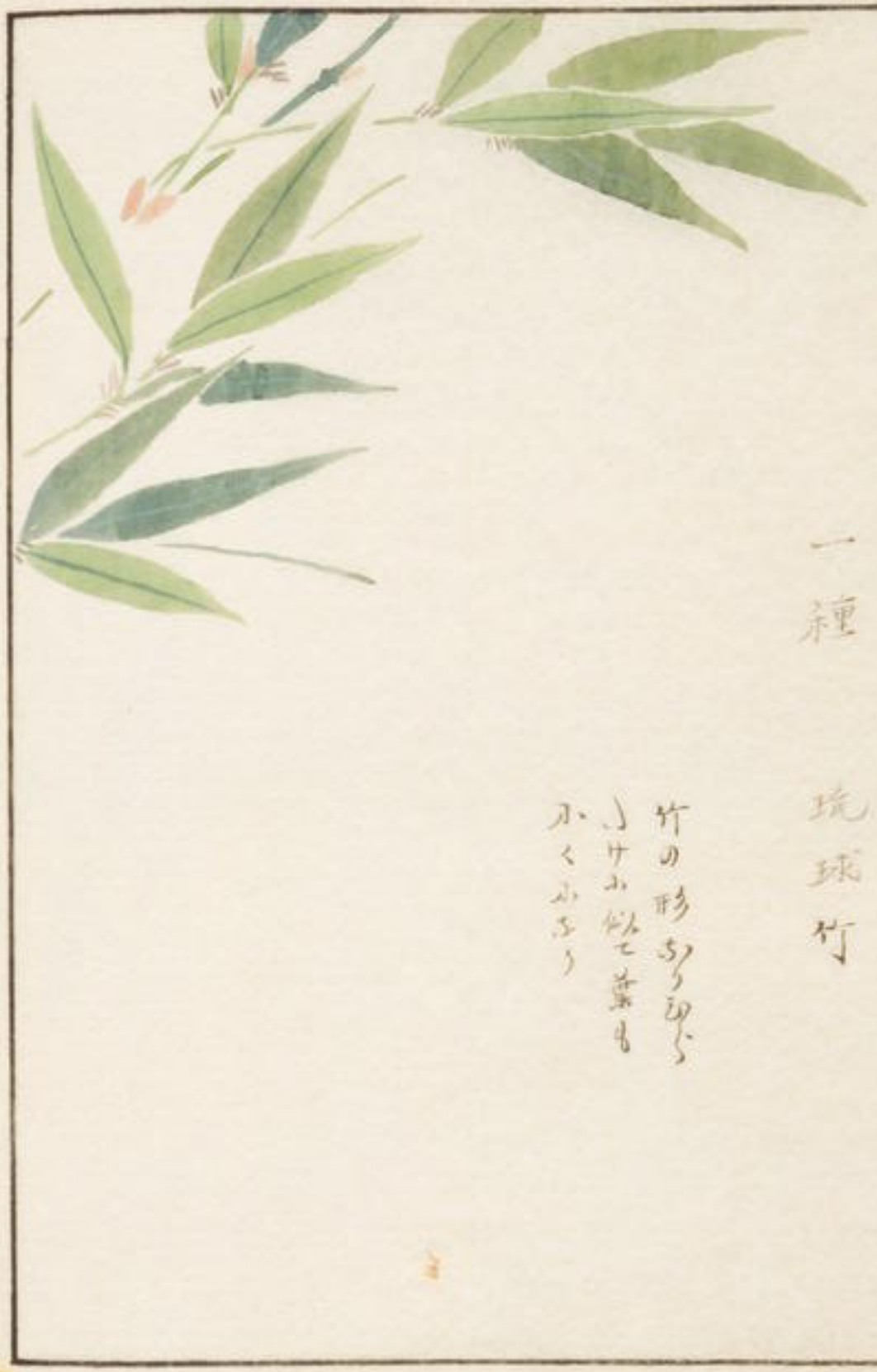
元琉球産おうこへら竹の形佛面竹に似て細く高さ六七尺節の形根の上尺計りの間密にして其上帯の竹の節の如し杖に造り又釣竿に造り用ゆ

方竹 集解

元琉球産ありとぞ
竹の形苦竹に似て
軟かに径り七八分許
り四稜にして角なく
枝ことなほかならしく葉は
苦竹より大く長く漢
上に大なるものありとぞ

一種

竹の形苦竹に
めれけの間ある
玄のあつき直に
軟かあつ高さ
一丈余に成て葉
も苦竹に似たり
一大ひく



一種

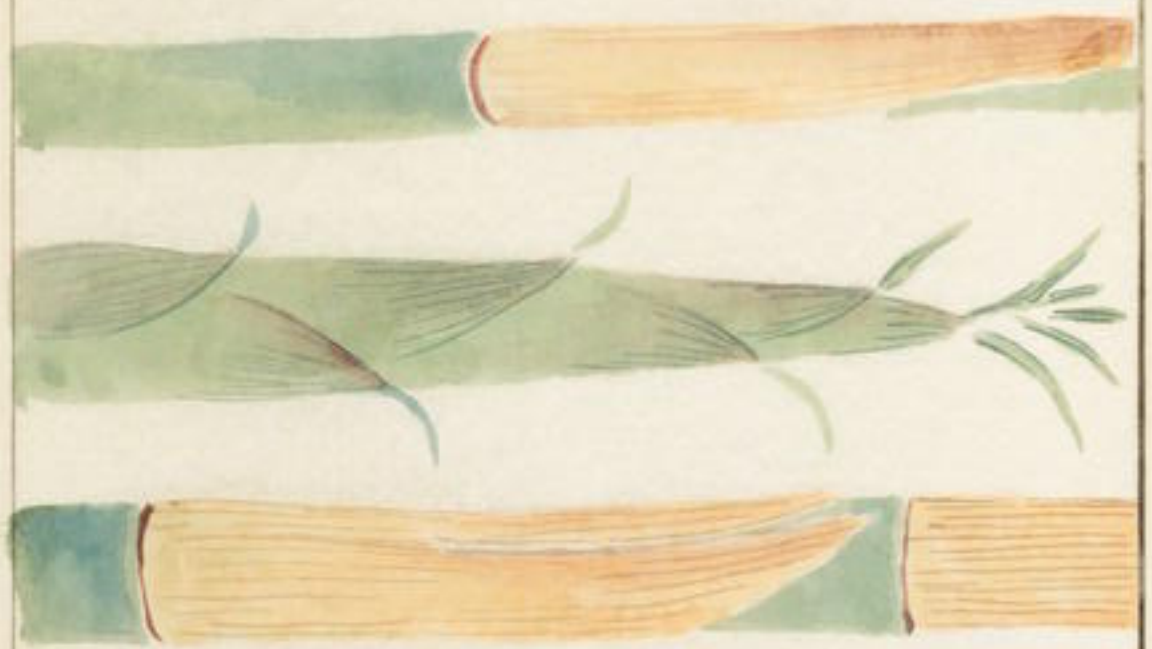
琉球竹

竹の形ありあら
しけに似て葉も
ふくふなり

一種

大明竹

竹の形のたけに
似て直にぶり高
さ丈許り葉ハ
苦竹に似て圓く
大い人



一種

唐竹 和名

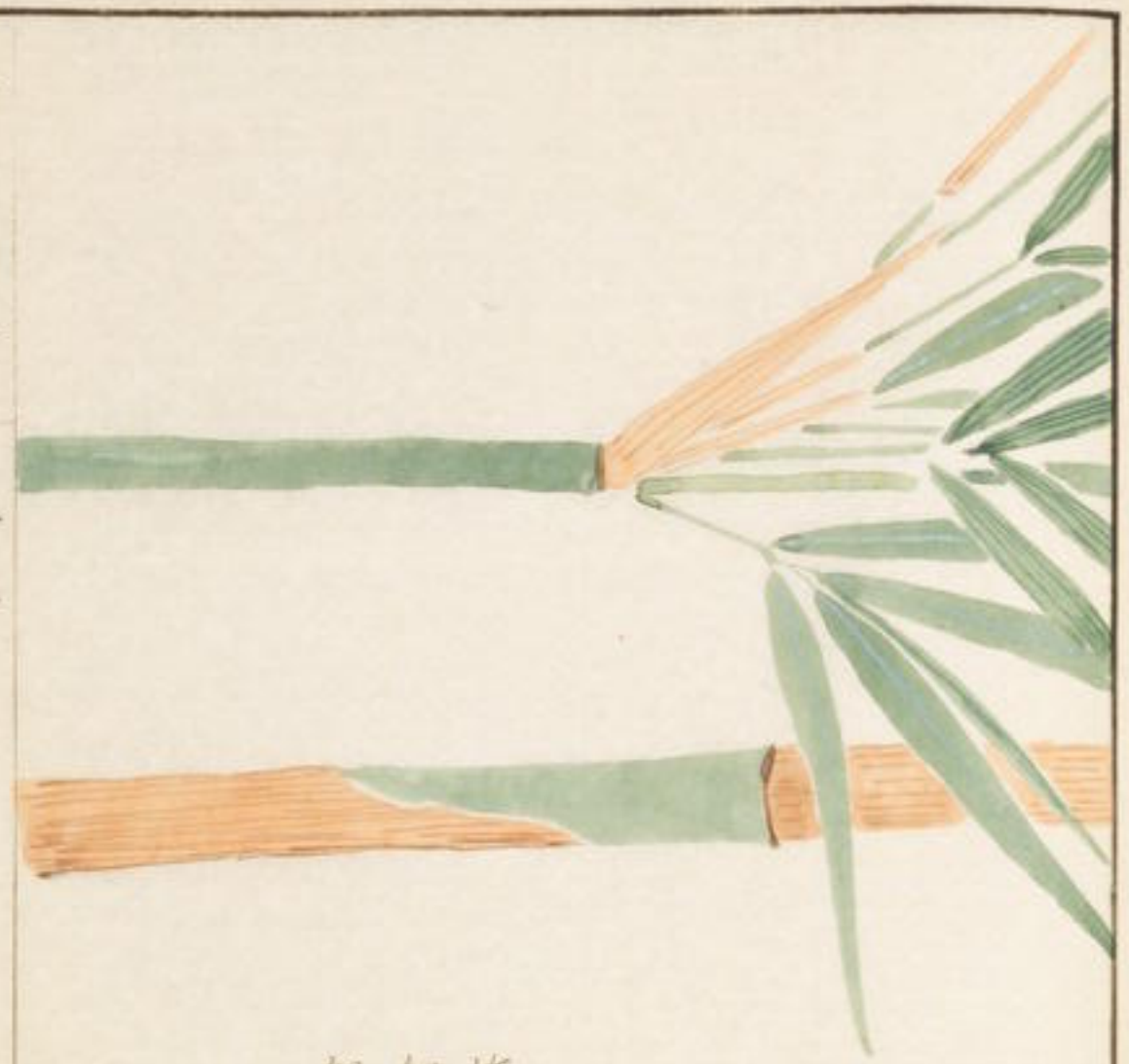
疎節竹 萃處考

竹の形若竹に似て節高りかに高さ一丈五六尺に至る葉ハ如此竹に似て短く節の間遠きものハ二尺許りに及へり

一種

麻手白竹 球

竹の形苦竹ニ似て細く葉ハ形若葉ニ似て色薄し



竹の形大明竹に似て
細く葉はめたけに似て
細く長く皆上に向へり

一種
迎葉竹

本草圖譜卷之九十六目録

服帛類

錦 ふしき
帛 たくのきぬ
綿 わた
月經衣 附録
孝子衫
衣帶
絹 きぬ
布 ぬの
褌襠 ふんどし
汗衫 たしのき
病人衣
頭巾 ずきん

幞頭　かうかう
皮腰袋　かはきんちやく
敗天公　ふるかさ
氊屜
麻鞋　をくつ
屐屧鼻繩　あれのはなを
噩牀下鞋
器物類
皮巾子
繳脚布　まとき
故蓑衣　ふるきミの
皮鞾　かはくつ
草鞋　わらし
自經死繩
死人枕席

紙　かミ
印紙
曆日　こよミ
桃符　ふくのきのふゝ
救月杖
吹火筒　ひふきふけ
鐵椎柄　かなつちのゑ
刀鞘　かたなのさや
青紙　あをかミ
桐油繖紙　りゆうきかミ
鍾馗
桃橛　もゝのきのくひ
撥火杖
鑿柄木　のミのゑ
銃楔　てつ　ゑのおしや
馬鞭　むまのむち

箭笴及鏃
紡車絃　いとまくるまのつる　八
連枷関　からさ不のせん
梳篦　くし
蒲扇　ひろらうちは
簟　たろ　ひしろ
漆器　ぬりもの
燈盞　あやさら
弓弩弦　ゆみのつる
梭頭　ひのかしら
揔檐尖　そてふのかしら
鍼線袋　すいとふくろ
蒲席　かまむしろ　九
簾箔　すたれ
研硃石鎚　ふらわく
燈盞油　あぶらさしのあぶら

車脂　くるまのあぶら
故木砧　ふるきまないた
筯　たし
鍋蓋　ふぐぶた
蒸籠　せいろう
故炊帚　ふるまゆまはぎき
簸箕舌　ミのした
奥笱
敗船茹
杓　ひやさ
甑　山しき　十一
飯籮　めしかこ
炊罩布　ふきぬの
弊帚　ふるはしき
竹籃　たけかこ　十二
魚網　あみ

草麻繩索　あさ
縛豬繩　ぶたのつあきなり
厠籌　かわやのへら
馬絆繩　むまのつな
牛鼻拳　うしのえあき　十三
尿桶　いばりをけ　十四

本草圖譜巻之九十六

東都　岩崎常正　著
男　岩崎信正
門人　小山廣孝　校

錦

服帛類

ふしき

織文　事物異名　裏色織文　上円

緑地五色　上円

舶来和産古へより多くあり其名ハ其紋の形色を以て名く唯金銀を以て作るのミにあらず時珍の説に以五色絲織成文章と云り附方に古錦の黒焼を用ることを云り

絹

きぬ 和名鈔　うぶぬ　纖縞 書經　繁總 事物紺珠

葉褕　解支　疎絙　流黄 共ニ同上

練さる処の生きぬなり此品ハ其類多し薬用ハ黄色を帯るものを用ひべし と云り生きぬの内ハ自ら黄色の物なり多くハ白色の物なり諸国絹を出し処ハ黄色の物を下品とす集解の練ハぬりきぬにして絹をやわらかにしたるものをいふ自然山野に生ずるやまいの絹といふものハ黄色とすべし別物なり

帛

そくのきぬ 和名鈔　ねりきぬ

ねりおし処のきぬ羽二重等の物を云り最も絲を染て織たる物織て染る物其色に因て名なり薬用ハ緋帛を用ひ此和名

ことゝと云物也

布

ぬの 和名鈔　水丸 名物法言

布ハ總名にして其類多し麻布木綿布紙布等の品物あり麻布と云る物ハ二種あり大麻を以て造る物ハちゝきちゝさいゝ等あり苧麻布ハからむしん此品にて造る物ハ奈良さらし近江さらし絲にまりを多くおして織る物をちゝきと云其類数種あり此を名物法言に紵布又水蠶と云事物紺珠に白緒関千布と云集解の絲布ハいとをうふべし蚕の系又木綿の糸を以て造るものなりん此物に倉ちまと呼ぶものにあたれり集解の木綿布ハ和産なり草綿にて織る物のこと諸國多く出し其類数種あり草綿の糸に麻を雑へて織る物をあり紙布と呼ぶものハ紙を細く却りまりてたてをきぬ

又草綿の糸にて造りよこに織の糸をたりあれたるの上品下品のたゞ
あり主治に青布と云ものハ藍少し染なしたる物にくし

綿　わしの和名鈔

蚕の綿草綿のわゝあり蚕の綿ハ蠶の羽化し出たるものを以て製せ羽
化せるとき八絲切れて繰出しかくり取ハ之舶来のぱんやと呼ふものハ
本邦に樹にくく俗にぱんやと呼ふものハ蘿藦の実にして木綿にハあらず

褌襠　とうさき　なれきぬ　またまき　ゆかし
ふんどし

漢土の製ハ和のパつちと呼ふものに近かりん本邦用ゆる処ハ絹布又木
綿麻布等を唯用ゆるのミ

月経衣 附録　人部にも出せり
婦人経水下るときに用ゆる物なり

汗衫　もたき　ぢゆばん　ぢぎん　もたつけ
もだた　てくら 北回　ちんた 肥前

もたにつけて着なれもの人絹布又麻布木綿にて造る凡て膚につく
ものハ汗衫となれへきや集解の襠襠を蘭山ハそぎなし　ちゆもんあり
とくし

孝子衫

忌服あるものゝきるものあり和に人別に製作あり

病人衣

疫病を煩いたるものゝ着たる衣あり

衣帯

附方に因る考ふ水ハこのハ帯にハあらさるへし婦人中衣帯又女中下裳帯によりハ下ゑめの細帯又ハ一をびにを云へるあり

頭巾　づきん

本邦にてハ方円ともに頭巾と云其製一ならハ絹布又ちりめんなり紗にて造る

幞頭　かうふり 和名鈔　かんむり　峩冠 名物方言

貴人の式に用ゐる冠なりにして下を漆にて塗り上に紗を以て包て造りなしたるもの発明に因て考ふるに漆の功を用ゐるに因れハ烏帽子にも同物となりたり

皮巾子

蘭山の説にてハ皮頭巾なりといへり

皮腰袋　かはぎんちやく　かはとうらん　かはさいふ

皮を以て造る其形円きあり長きあり角なるあり其製一ならハ皮にも類種あり

繳脚布　すこき 和名鈔　きやむん

遠行する時に用ゆる物に絹布又木綿にて造る

敗天公　ふるがさ　かぶ被ぐ

漢土の製は竹を以て骨となし茗葉にまきと云ふものを以て造る本邦の製は竹を以て骨となし竹皮を以て造る物又竹を細く割りて造るものをけの葉にて造る物と呼ぶものにて造るもの等之其形一ならず円きあり平なるあり集解の襯襯子は蔽日と云へるに因れば夏月用ゆる処の日笠なり本邦別に製ゆるものなし薬用には敗れたるものを用ゆ

故蓑衣　ふるきもの

古く用ゆる処のものに本邦の製は草を以て又稲草にて造る

氊屜

履の中にしく処の物毛氊を用ゆるよしに

皮鞾　かもしつ

皮を以て造る処の履に藥用には牛皮を以て造る物用ゆるとなり

麻鞋　をしつ　和名鈔　あさわらし

麻を以て造る処のものに

草鞋　わらし　わらしつ　草屩　事物異名

稲草を以て造る二種あり紐を長しなほものをわらしと云紐を短くなし別に麻又木綿にて紐を附る者これも同物に

又草履と称せるものも共に同物へ

履屧鼻繩　あしたのをあを　けたのをあを

多く桐を以て造る此物種々あり藥用には古きたるを用ゐるよし

自経死繩

首をくるに用ゐる処のなわへ

靈牀下鞋

死人を置し牀下の鞋なり

死人枕席

死人の枕を丁にしく処の席なり

器物類

紙

かゝ　薛濤楮 名物方言　蜀牋 同上　陟釐 事物異名

楮先生　楮國公　楮知白 共に同上

本邦にては楮の皮を以て製したるも上品とはいふまゝを以て造る物も下品とは甚さかはれ甚し紙の種類甚多し委くは記さは先其旨を記さは先其大旨を記のこ檀紙大鷹奉書美濃いなき杉原にまくすん紙のゝ入かんじ等其形の大中小に因て名を分つ此外諸國より出せ処の地に因て又名ゆり漢土の製には竹を以て製したるを竹紙と云藤を以て造る物を藤紙と云此麻にて造る桑皮を以て造る麥麩稻稈にて造る物あるゝ又銀札も呼ぶもの類あるゝ

和に古き紙又ゐくも呼ぶものをせきおもし紙とおもしのゆり

青紙　あをかみ　あいかみ

藍にて染なしたる紙又近江の國にて造る鴨跡草を以て製せる紙なり
漢土の物ハ宝治に青黛ありといへるにまれハ本邦の製とハ異之

印紙

印のをしたる紙なり

桐油繖紙　かうかさかみ

和の雨傘ハ荏の油を用ゆ漢土にてハ桐の油を用ゆといへり

曆日　こよみ

鍾馗

附方畫鍾馗紙といへり

桃笋　ことこのきのみ

桃の木にて造る札なり漢土にハ此札を門に打といへり

桃橛　えとのきのくひ

家を建る時桃の木を以て杙に打て祭をなすといへり

杖月杖

本邦にハふし　漢土にハ月蝕のとき　月に向て打杖あり　これハ月の蝕せらを　救ふの意あり

撥火杖

火をかき出だ木にして大竈の元にハ必ずあり　附方の燒殘火柴頭ハ　たき木の燒殘りの先ん

吹火筒　ひふきたけ

竹を以て造る物ん

鑿柄木　のミのゑ

のミの柄の古く用ひてなれたる処を用ゆ　附方に手槌花の名　あれハ古きものをまつしとれ

鐵椎柄　かなつちのゑ

鐵椎ハかなつちにして此柄を用ゆがんのうと呼ぶものと此と同物あり

銃楔　てつぱうのあしや　かるの江戸

蘭山の説にてハてつぱうのこゝやとあれ是に従ふ

刀鞘　かたなのさや

刀又太刀服さしも同物あり

馬鞭　むまのむち

本邦の製多くハ竹根のむちを用ゆ皮を用て造る少し塗むち鉄むち等の製あり

箭笴及鏃

箭笴ハやがら又やのこと云鏃やぢりと云此やぢりハ其製数種あり

弓弩弦　ゆみのつる

大弓又半弓のつるあり此二品のつるハ麻を以て製れやう弓ハ絲を用ゆ
薬用ハ其品ハ因られ弦の功を貴ぶのこと見へたり

紡車絃　いとよりゐるまのつる　ちやいと　ちぐん

紡車ハ綿をうて絲とあれ車あり絃ハ此ゐるまにかゝる処の糸あり

梭頭　ひのりしら

もしの横糸を渡れものをひと云

連枷関　かりさゝのせん　ノるりあり　まひき収
むきうち

稲麥をこきて又此ものにてうつん柄を竹にて造りめくりあれありを
木にて造る

揔檐尖　ちゝおのかしら　てんがんぞくのりしら

揔檐ハをふん此両方の尖り又本邦にハ杉の木かしの木或ハ竹にて作
る

梳篦　くし　辟鹿　名物方言

ムしと呼ぶとこゝとも別つときハ梳ハ歯の疎きムしにしてときムし
あり篦ハ歯の細きムしをきムし又此品竹にても作る

鍼線袋　まりいとぶくろ
まりいとをいれる袋あり

蒲扇　ひろうちハ
蒲葵にて造るうちハあり舶来なり又薩及にても造るもいつり

蒲席　かまむしろ
かまの葉を以て造る藥用にハ古き物をよしとし集解にハ蒲一品にハあ
らし稲草又龍鬚草にて作る和のねぶた又ねぶさとなしものあり
主治の編薦索ハむしろのたとへ寡婦薦ハやもめおんなのねぶさあり

簟　たかむしろ　たけむしろ
竹を用て編て席とふれものあり

簾箔　すだれ　よしすだれ　よしず
蓬箔　事物異名
葦にて製するをふ能く上品なるものを御簾と云下品ふるをも
ふれと云

漆器　ぬりもの
總て漆にてぬる処の古き器物を用ゆるをよろしとし硃ぬりの物を
用ゆるすしをいつり

研硃石鎚　ふりゐし　ふりゐし

辰砂をたるたるきあり

燈盞　あぶらさら　あぶらかけ

鉄又銅ぶんちう又かはらけにて造る処の物

燈盞油　あぶら　さくのあぶら

燈火のもとに残りたるあぶらん

車脂　くるまのあぶら

くるまの軸にぬる処のあぶらく

敗舩茹

漢土の製ハ古へハ竹茹を用ひ今麻節に油石灰を和し用

せと云り本邦の製ハ柏皮又杉皮等を用ゆ少しく異なり藥用にハ

敗れ舩の物を用ゆとゆへり

故木砧　ふるきまないた　まりだん　紹上

其形大に不同あり主治に几上屑と云ハまぶいたのこと砧上垢ハまぶいたのあらく

杓　ひさこ　和名鈔　ひさく　ひさかく　関東　ちやく

其製竹を割て製する物又竹のまゝ製する物桐の木にて製する物柏の

木にて製するもの等あり漢土の物瓢にて作るなく首のあかきをひさこと

云ひさこの名によりて今用ゆる物をひさことゆへり

筯　そし　をてもと　豊前

其製竹をわりて作るもの細き竹にて作る物粉の木竹にて作る柳の木にて作る物以上常に用なる処上品の物の紫檀又たがやさん象牙にて作る其外ぬりたし又木へ鉄を以つて作る者あり

甑　おしき　和名鈔　ふろし　曾尾　名物方言

本邦多く材をへきまけ物と為る竹にて造る物少し尾にて作る物ありといへども是又少し　發明甑帯にてしきを結ぶ処のものおるべし甑垢にこしきのあかん故甑蔽にこしきの内にしく処のことと云るものゝ

鍋蓋　なべふた

鍋に類あり鉄にて作るもの銅又たんちう又土にて作るもの等あり此物のふたなり

飯籮　めしかご　めしゴウ

本邦竹にて作るものおしまけ物を以て漆にてぬり用ゆ又材を以てをけとおし用ゆるもののこと

蒸籠　せいろう

本邦の物板を以て作る餅をぬるに多く用ゆ

炊單布　おきぬの　おしきぬの

甑の中に布き用ゆる処のぬのゝ

故炊帚　ふるきゆまはぐき

ゆまとの元に故く用ゐるはらきあり本邦多く稲草の穂又黍の穂にて作る

弊帚　ふるはらき　ふれはらき

漢土の製も竹枝又黍蒲等にて作る和も又同し又棕櫚の毛を以て作る物多し

簸箕舌　このしろ

簸箕ハこゝ和製にハ別に舌を作れる女竹を以て作る物あり

竹籃　たけかこ

其類甚だ多し大小細疎又其用ゐるに隨て製作せる故委く記にあり

ハれ

魚笱

魚を取るの器と云ふ和にどゝ称せるものハ細き割竹を以て作る其形大小不同ありやなと称せるものハ水に関して魚をとるの器之此条のものハとゝ呼ぶものなりけん

魚綱　あゝ

魚をとるのあゝに数種あり　其製大小細疎の別あり

草麻繩索　なわ

草の稲草を以て なわに作る之麻ハあきを以て作るなわ之これ名不

そのきと云其製太きゆり細きあり一ふくは時珍の説に小曰索大曰繩
といへり

馬絆繩　むまのつな

馬の首につけて引ふはあり

縛豬繩　ふたのつなぎなは

豬をのなきおくなはく

牛鼻拳　うしのはなぎ　うしのはなつな

牛鼻木は牛の鼻をちかちたるなはの本に附をし木なるへし
牛鼻繩は牛の鼻にうかちるのなはなくし　二品とも附方に別
てり

廁籌　かはやのへら　くそかきへら　かはやのあてき

雜木類にもあり　重出之田家の辺鄙なる処にはありといへり　附方には刮屎柴竹
とあり竹又柴の細きをもつて作ると見へゆり

尿桶　いぜりをけ　せらへんたま

舊板は古き小便をけのおいをけ木の板之舊箍以上の物はふるきたりと

本草圖譜

灌木類

寓木類

苞木類

90-96

九